

「救世主の国」エルサルバドルから
正念場を迎えた国家再建

一二年にわたる激しい内戦の末、エルサルバドルは平和と民主化への道を歩み始めた。中南米各国に共通する「政治的暴力」と「富の偏在のシステム」を、この中米の小国は本当に改革できるのだろうか。国連の介入による完全停戦、軍部の再編成、反政府ゲリラの武装解除、土地問題の改革、そして平和条約に沿った総選挙の実施。今秋の国連エルサルバドル監視団(ONUSAL)の完全撤退後、新しい国造りが彼ら自身のに託される。

首都・サンサルバドルの市場やデパートには物があふれ、道路には新車のマイクローバスが走り回っている。これが一二年の内戦を経験した国の直後なのか。その様子は、東京とまったく変わらぬ。本当にこの国が貧困で苦しんでいるとはとうてい信じられない。だが、それも見せかけの経済発展である。

現在、この国の歳入の第一は、皮肉なことに、内戦によって海外に逃

れた家族からの送金によってまかなわれている。その額は、輸出の第一位を占めるコーヒーの約一・五倍にも達している。

年の華やかさや豊かさに比べ、地方の村は電気や水道のない状態が続き、いまだ貧困の中に置かれたままである。

年の犯罪は増加し、都市と農村の格差も広がり続けている。問題は、それが見えにくくなってきていることだ。

町を歩いていた自動小銃姿の兵士が、スラム地区の入り口で警戒していた兵士が、そして橋・道路を警備していた兵士がいずれも消えていた。停戦条約に基づく政府軍の改革は着実に進んでいるようだ。だが、元ゲリラ戦闘員たちの社会復帰はそう簡単にいかない。

平和条約に則って、ゲリラ組織を解体し、新たに創られた国家市民警察(PNC)にそのメンバーを編入させるという手はずだった。だが、一二年に及ぶ内戦の結果、幼い頃から戦闘しか知らない若者は、精神面に於いて何らかの問題を抱えている。

た。アメリカ人精神治療士によると、「一〇分間、じっと落ち着いて机に向かって座っていることができない」と言う。これでは、せつかくは言った警察学校も満足に修了することができない。そのため、PNCは人材が不足し、何度も人権侵害を非難され、現在は解体されている旧警察部隊から人員を集めざるを得ない状況になった。これでは何のための改革かわからない。

△写真キャプション▽

・停戦条約発効後、メルカード(市場)を歩いていると、「娘の写真を撮っておくれ」と声をかけられた。メルカードの中は活気に溢れ、人々の生きる力強さを感じることができ

る。
・シンナーを吸い、眠り込んでしまった男の子。ここは首都サンサルバドルの中心地・パリオス広場。二年前、平和停戦の祭典が行われた公園でもある。当時、まったく目につかなかつた、路上生活をする子どもたちがたむろするようになっていた。

・ イエス・キリストの復活祭の準備をするかたわらで、シンナーを吸う男が横たわる。停戦直後の二年前より、スラムやバスターミナルの裏通りで寝込む酔っぱらいの数が増えたようだ。

・ 停戦和平条約が正式に発効した一九九二年二月一日、この日、FMLNゲリラたちは堂々と首都サンサルバドルを行進し、数万人の市民たちの温かい歓迎を受けた。ゲリラと人々は、平和の到来を、通称「プラザシビカ」広場で翌朝まで祝った。

・ 平和条約発効の祭典。首都サンサルバドルのバリオス広場に陣取った数万人の市民は、山から降りてきたFMLNゲリラたちを熱狂的に迎えた。

・ 総選挙運動中の右派ARENDA党の集会で発砲事件を起こし、ONSALの兵士に連行される少女。ONSALはトラブル解決やその発生防止に効果的な活動を続けている。

・ 一九八〇年に暗殺されたオスカール・ロメロ大司教の追悼集会が今年も行われた。宗教と政治との間に立つて苦しんだ彼は、エルサルバドルに限らず、民主化運動を進める中米の精神的な支柱である。

・ 農村では、内戦中・停戦後でも変化することのなかったマチズモ（男性至上主義）の世界が続く。昼は畑で働き、家に帰っては家事労働をする女性たち。内戦の影に隠れていたラテンアメリカに共通する問題に目が向けられる日は果たして来るのだろうか。

・ 一〇数年間続くスラムの生活。共同の水道も増やされることもなく二年前と同じ姿。パンアメリカンハイウエイ沿いのこのスラムは、外見は整えられていたが、一歩足を踏み入れてみると、その生活はほとんど変化がなかった。

・ 薪用の木を拾い、家路を急ぐ女たち。働くことだけが「人生のすべて」のような女性たち。

・ 外国からの訪問者が少ないこの国では、旅行者はどこでも温かく迎えらる。市場でも路上でも、市民の活気ある日常生活を見ることができきる。